



KATSUKI



今も残る自然と人間の営み
〜古沢の風景〜

新百合ヶ丘駅前の喧噪から離れ、歩くこと約十分で緑豊かな古沢地区に入ります。この地区は、地図に灰色で示すように、稲城市平尾地区に隣接する広大な丘陵地域で、市街化調整区域に指定され、近郊農業が行われています。

麻生区文化協会では、毎年二月七日に区役所前広場であさお古風七草粥の会を開催していますが、二月五日に、古沢地区の農家のご厚意で、畑の隅のハコベラ、ナスナ、ホトケノザや、水路に生えるセリを採集させていただきました。

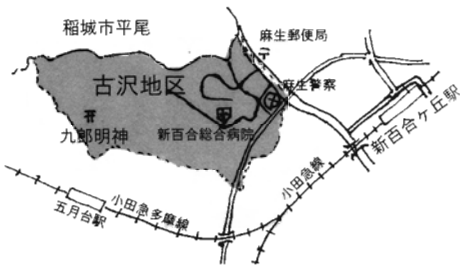
二〇一二年八月に古沢地区の丘陵地に開設された新百合ヶ丘総合病院を通過して山道を進むと、さし絵のような農業地区が広がります。古沢では、いくつかの農家が、自ら農業にたずさわる傍ら、農地の一部を市民農園として一般市民に貸し出すとともに、栽培のアドバイス指導にあたっています。

農地を抜けると森林に入ります。あちこちでさえざる小鳥の声に深山幽谷に入ったような気分になり、大いに癒やされます。

五月台駅の方角に向かって山道を下つていくと、麻生区に伝わる義経伝説の一つである九郎明神社にたどり着きます。鎌倉に馳せ参じる義経が古沢村に二泊し、礼として村人に与えた刀一振りをお祀りしたと伝えられています。

麻生区を中心に近く、交通の便がよいこの地、遠くない将来、大規模な市街地開発が行われるものと予想されますが、できる限り自然の豊かさを残していただきたいものです。

(絵と文 佐藤勝昭)



九郎明神社の祠

リニューアルしたからむし五十九号の各ページを紹介します

P1 麻生区のみざまな風物を、美術工芸部メンバーの絵と文で紹介いたします。

P2 三十周年記念のキャッチコピー「あたらしい風と創造」に込められた思いを菅原敬子会長が熱く語ります。

P3 (1) 本会の活動を支える方々に書いていただきます。今号は麻生市民館の別所毅新館長による「麻生再発見」です。
(2) 麻生の歴史を語るシリーズ「麻生アーカイブス」が始まります。
第一回は「華沙里通信」です。

P4 麻生区の文化活動に貢献された個人・団体を紹介します。今号では、麻生区文化協会に長年貢献され、二月に逝去された杉本長治元会長の足跡を、専門委員の千坂隆男さんが振り返ります。

P6 (1) 夏休み親子教室、今年開講された十七講座すべてについてのレポートです。
(2) 市民交流センターやまゆりの活動を支えるNPO法人の理事長である植木昌昭さんにインタビュー。

P8 会員の活躍のページです。東日本伝統工芸展 深野怜さん、胡桃バリエスタジオ 雑草と呼ばないで 佐藤勝昭さん

新しい風と創造

麻生区文化協会 会長 菅原 敬子

昨年は文化協会創立三十周年を迎え式典等の行事を開催しました。これを期に目標を「新しい風と創造」におきスタートしたところです。

「新しい風」、それにむけての「創造」、何かわくわくさせるものが生まれるといいなあと思います。

まず、顧問・専門委員の皆様との懇談の場を設け、それぞれの意見を伺うことができましたし、そのことをこれから大事にしていきたいと思えました。

ブローグ

「新しい風」を考えるにあたって、文化協会の発足時のねらいを基本におく必要があります。

それは、地域文化の振興はもとより、地域文化を育てるためには、多くの区民の参加を得て生活に根ざした文化を高めていく事だったと思います。初代会長をはじめ多くの先輩の願いは、この三十周年を迎えその方向で実りつつあると思います。

まずは、麻生区づくりの目標を「芸術文化の薫りのする街」と位置づけることができ、文化協会の活動もその一端を担ってきたことでもあります。

市民の中でも文化振興への評価は高まってきていると感じています。

「新しい風」はその源を活かしつつ、その原点を見失うことのないように進めていきたいと思えます。

それでは、どのような視点で考えたいのか私なりに述べてみたいと思います。

マンネリ化の解消

例えば、今年で何回目でしょうか、「くるま座集會」を市長が開催したところ、ある区では参加が四名しかなかったという報道がありました。

それは、同じことを繰り返すマンネリ化はだめだということでしょう。その後やり方を工夫したそうです。

解消の視点は①スタイルを変える ②方法を見直す ③内容を検討する等々。まずは具体的に今の活動を見てもみようではありませんか。

三十周年記念誌「からむし」は、編集長を中心に斬新な冊子ができ上がり、他区の文化協会や配布した関係者、手にとられた方々からも高い評価をいただきました。もう新しい風をここに感じさせられました。

人材を広めよう

麻生区を愛する人々をもっと取り込むことができないでしょうか。それには、「市民参加型」の行事や活動内

容を検討することが大事かと思えます。「見に来る」から「一緒に学び、一緒に活動し、一緒に作り上げる」等の参画意識をもつことから文化への関心を広め、区民が育っていく、仲間に入っていたくことにつながると思えます。

「高校生・大学生・社会人」等、或いは「異年齢・同年齢性別」等を限定した方々や異なった分野の仕事の方々の意見を聞くことのできる場の設定企画も新しい風と創造につながるのではないのでしょうか。幅広い方々どう結ばれるかについて歩を進めたいと思えます。

財政基盤づくり

文化協会の財政は、毎年厳しく新しい行事を位置づけるのが難しい状況にあります。しかし、市民参加型事業ならば、協賛金等、企業・商店に積極的に働きかけることも可能です。有料での講座や教室の開催も検討してみてもどうでしょうか。企業・大学・学識者等の協力もいただき、有料でも聞きたい、継続しても参加したい教室の開催も検討することは「三石」鳥ではないでしょうか。

麻生の歴史・文化をまとめる

総会において麻生の歴史や文化をしっかりと継承していくことが提案されました。その背景には高齢化が進み重鎮が亡くなる等の現状があります。しっかりと継承していくことを今か

ら取り組む必要があることは役員会でも心してきたところです。今後どのような形でどんな内容を残していくかについて検討する必要があります。

そのためには手始めに、私たち自身も学ぶことができ市民参加も可能な「歴史講座」や「歴史散策」「文学散歩」等々の開設も有効なのではないでしょうか。これらの講座は新しいとい

うより、かなり以前にも取り組まれていたと思えます。今回は、「歴史を残す」から「たどる」「まとめる」を新しい視点につなげることをしたいと思います。

「麻生の文化史」への一歩

「新しい風」の歩は歴史から。シリーズ講座の開催や、何をどのような形で残すか、そのための検討をする、委員会をつくる、専門委員の力を借りる等も考えられます。年で麻生の文化史を完成するのではなくとも着手することなのではないかと思えます。

麻生には、多くの詩人・俳人作家が歴史に残っています。この方々の作品を読む、読んで訪れる等、文学だけでも楽しい講座や文学散歩になるように思えます。また、歴史を刻む碑とその歴史や当時の青少年が学んだ学舎や歴史等多くの学ぶべきところがあります。

麻生区の開発と発展だけをまとめても新しい住民や若い方には役に立ちそうに思えます。

私的に記して残された本もたくさんあるのではないかと思います。

また、どの学校でも何周年という記念すべき年には作成し残している学校・学校周辺の地域の変化や歴史なども記された記念誌や資料等も貴重なものであります。或いは、町会等が残している歴史資料などもあることでしょうか。

歴史を語る大事な本を集め歴史コーナーとして残していくことも必要なことかと思えます。

例えば

・田園の憂鬱―大正五年

佐藤春夫

・田園―大正十四年刊

「土の力」 広田花屋

・北原白秋―昭和十年秋

七首 三輪高藏寺

柿生ふる里―昭和十七年

王禪寺を訪れて詠んだ句

「柿生」長唄

エピソード

「新しい風」は、古い源から発せられると思えます。その風をつくっていくために、いろいろな視点からスタートを切りましょう。



私の麻生再発見

麻生市民館館長 別所 毅



昭和四十九年、新百合ヶ丘駅が誕生しましたが、こうこうと照らされる駅の明かりの中、人影もまばらな階段で二匹のカブトムシが元気に歩いている姿を目にしました。その後、少しずつ駅周辺の開発が進む中、最初に立ち上がったのは区役所の建物であったような記憶があります。私は昭和五十五年川崎市の職員となり、その二年後に麻生区は多摩区から分区しました。私は当時、麻生区とは縁のないところで勤務していましたが、平成二十四年の四月に麻生区の柿生連絡所に異動してまいりました。柿生連絡所は本年四月に麻生区役所柿生分庁舎と名称を変え、行政機関としては行政端末サービスを残すのみで、

現在は耐震強化工事を行っております。今後また新たな歴史を刻んでいくこととなりますが、その前身は多摩区役所柿生出張所であり、川崎市との合併前まで遡れば都筑郡の「柿生村外ヶ村組合役場」(所在地は柿生駅前で、現在地へは出張所時代の昭和五十五年に移転)でありました。当時の看板が柿生連絡所に残されておりましたが、川崎市や麻生区の歴史・文化と向き合うような仕事とは無縁であった私には都筑郡という響きが新鮮に感じられたものでした。

柿生出張所に三年おりましたことから、浄慶寺・秋葉神社あたりを散歩したり、月読神社から麻生不動尊、あるいは修廣寺から白鳥神社あたりを散策するなど、歩くことが少し好きになったものでした。本年四月に生涯学習支援課に来てから細山神社や高石神社などへ足をのびしましたが、まだまだ小田急沿線から抜け出すまでには至っておりません。

区内には散策の目標にしやすいく神社仏閣だけでもたくさん点在しており、これからもできる限り歩いてみたいと思っております。歩いておられますと様々な風景も同時に目にすることが出来ます。例えば、春には麻生川に限らず、どこを歩いても桜の花びらが迎えてくれます。また九郎明神社あたりを散策すると、いたる所からタケノコの息吹が感じられ、農家の軒先の無人販売ではつい品定めをしてしまいます。道を登れば、いつの間にか都県境を越していることに気づかされます。

ゆつたりと歩きたいときには川沿いへ向かいます。麻生川は鶴見川に合流するまでは小田急線との交差点以外はつと川沿いを歩けます。最近、スポーツ健康ロードとして整備を進めてきた片平川沿いも歩きやすい道のつだと思えます。また、鶴見川に流れ込む河川だけではなく、区内からは平瀬川や五反田川、三沢川が多摩川へと注いでおります。多摩川と鶴見川の分水嶺が区内を横切っていたり、また、都県境にすぐ行き当たったりというのも麻生区の面白さだと思っております。

麻生区はこの三十余年で新百合ヶ丘駅周辺や多摩線沿線などその姿を大きく変貌させてまいりましたが、区内を散策すると、ほととできる風景に出会えます。皆様も秋の一日ちよと散策してみたいかがでしょうか。

麻生アーカイブス①

「華沙里通信」について

麻生区には多くの方たちが歴史や文化、また郷土の伝統などについて記録したり編集してまとめた貴重な資料が多く残されている。「からむし」編集委員会ではそれらの資料を多く皆さんに知ってほしいということから、記録した方や編集した方の了承のもとに紹介させていただくことになった。第二回は「麻生アーカイブス①」としてギャラリー・華沙里のオーナーであり、文化協会の会員でもある井上美佐子さんが編集し、発行していた「華沙里通信」を紹介したい。

ギャラリー・華沙里は1977年(昭和52年)に「喫茶・軽食・華沙里」としてオープンし、7年後の1984年7月に「華沙里通信」の創刊号が発行された。その頃、コンサートや一人芝居、朗読なども行われ、まさにサロン文化の中心となった華沙里には地元に住していたり、川崎にゆかりのある多くの文化人や芸術家たちが集い語り合っていた。「華沙里通信」は創刊から1991年(平成6年)の最終号(86号)まで発行されたが、その間、麻生区文化協会初代会長の藤田親昌さん(14号、87号)、三代会長の杉本長治さん(57号から69号まで連載)、そして、小島一也さんも「郷里のルーツを探る」と題して4号から15号まで連載している。またオーナーの井上さん自身も安曇野に道祖神を訪ねた紀行文やスペイン紀行なども興味深い。そして、岩崎加根子さん、沼田曜一さん、河内桃子さん達の一人芝居や朗読のこと、麻生フィル創立期の皆さんが練習帰りに立ち寄って語り合っていた様子、安田伸さんの演奏会、その他にも多くの地元の文化人の皆さんが関わったこの「華沙里通信」は麻生区の文化の歴史を伝える貴重な資料であり大切に保存していきたい。

87号〜102号までは麻生ふれあい通信として引きつがれタウン紙として全戸配布された。



井上 美佐子さん

(岩田輝夫記)

追悼

杉本長治先生

千坂隆男

平成二十七年二月四日、麻生区栗木会館において故杉本長治先生の告別式が行われました。先生の遺徳を慕う焼香者が会場に溢れ長い列ができました。

杉本長治先生は麻生区文化協会第三代会長として、麻生区の文化の向上のため尽瘁されました。体調を崩され会長を退任し顧問に就任されたからも、麻生区文化協会の直面した難問解決には一番頼りになる顧問でした。先生の足跡を振り返り、先生の霊の安らかなることを祈りたいと思います。

教師としての道

杉本長治先生は昭和二年神奈川県都筑郡柿生村大字早野の農家に生を受けた。多摩丘陵の緑豊かな雑木林と谷戸の田畑に囲まれた純農村である。

当時、村の秀才は教師となり若者を指導育成するという風があった。杉本長治先生は柿生村立義胤高等小学校を卒業すると鎌倉にあった神奈川県師範学校に入学し郷党の願いに応えた。卒業すると川崎市に赴

任したが、二ヶ月で病に倒れ五年間の闘病生活を余儀なくされた。この事が先生の間形成に大きく関わっている。先生の粘り強くやり遂げる強い心、相手の考えを聞く広い心、思いやる温かい心が培われたと推測する。



健康を回復された先生は、昭和二十八年教壇に復帰され教育活動に専念された。

昭和五十二年東桜本小学校校長として学校経営の先頭に立った。「子どもたちに寄り添い一人ひとりの子ども能力を引き出す教育」を理念に「障

害児と通常児の交流を目指して、効果的な指導のあり方」の実践研究をまとめ、障害児教育に新しい道を切り開いた。

久末小学校校長の時、地域に根ざした教育に着目し、教育の活性化と地域との連携に貢献した。

全職員が提出した原稿を話し合いながら加筆校正し、夜遅くまで校長室に明かりがついていた。その成果が第一法規より刊行された『子どもが輝くとき』である。この書は広く教育界の注目を集め、マスコミにも大きく取り上げられた。そうして、下中記念科学財団より助成を受けて纏めた「地域の特色を生かした教育実践」は同財団より優秀賞を与えられた。

杉本長治先生は組織の人でもありません。

創造的実践者として、横浜大会を神奈川大会に、変更させ、県下全体をまとめた、筋を通す人であった。川崎市の教育研究団体の組織を強固にし、現職と退職者の合同会を誕生させたのも先生である。

校長として学校の日々の営みに心を配るのみならず、神奈川県や川崎市の教育諸団体の要職を歴任し、会の運営に創造的・実践的な手腕を発揮して教育の向上に力を尽くした。

昭和六十三年、久末小学校校長を最後に惜しまれつつ退職された。

地域での活動

杉本長治さんの麻生区文化協会との出会いは初代会長故藤田親昌によつて退職と同時に入会させられたことに始まる。アカデミー部運営委員として「歩く雑学教室」で市民に奉仕し、その後総務、副会長を経て平成十二年麻生区文化協会第三代会長に就任した。平成十八年四月、体調を崩され会長を退任するまで三期六年川崎のため、麻生のため会長職に精励された。

杉本長治さんの描いた理想を仕事と本人の文章から描いてみる。

『文化かわさき』

川崎区文化協会 相沢二男

川崎市総合文化団体連絡会が編集発行する『文化かわさき』は川崎の市民文化向上のため藤田親昌が立ち上げたものである。委員は市内各団体から推されたいわば素人で、優れたジャーナリストの藤田さんから見れば随分歯がゆいこともあったろう。

しかし素人ながら委員会は、小冊子とはいえ、力を合わせ新しいものを作るという緊張感を共有し、この雰囲気の評価していた。

杉本さんは平成二年から十年まで委員を務めた。一方に偏した見方考え方を嫌い、広く全体を見ること

のできる方で、微笑を含みながら穏やかに語る姿には、人を包み込む優しさがあって、座談会の司会を務められた。

杉本さんの本領は、平成十年の教育特集で発揮された。巻頭の論評は一本に絞られ、後は一般市民の投稿手記で構成することにした。

玉石混交、顔を顰めている杉本さんにどしどしボツにしたらと言うと『そりゃいけないから困る』と言いつつながら投稿者筆者とも話し合い、粘り強く進めていた。

こうした苦労が実を結び、三十五名もの市民の教育についての発言が、紙面の中核を占めるようになってないものになった。

教育の問題は学校だけに任せてはならない、市民誰もが関心をもつべきだ、と言う鮮明なメッセージが伝えられた。

『創立二十周年記念誌』

伝統と創造 杉本長治

過日「文化協会が変わってしまった」

た。伝統は失われてしまった」との批判をいただきました。しかし残念ながら創立時の理想が失われてしまったとの批判には、正面切つて反論はいたしませんでした。時が移り人が変われば物事は変わると思っています。問題は変わり方だと思えます。



麻生区文化協会では、ここ数年次代を担う子どもたちに視点をあてての事業を展開しています。また伝統ある七草粥の会を広く市民を対象に区役所広場で行い大きな反響を呼びました。そうして七草粥は麻生区の正月行事になりました。地域の伝統文化の発掘、継承事業にも取り組み、幅広い質の高い活動をして参りたいと思います。



『二十一世紀へのメッセージ』
ともに創りあげる麻生

麻生区「区づくり白書策定委員会」
委員長 杉本長治

麻生区には「自分たちの麻生区をより暮らしやすいまちにしよう」と大勢の方が活動しておられることを実感しました。

「あなたの声が麻生を作る」との基本的な考え方で作業を進めてきました。このことは「あなたが創る麻生の町」であり「私が麻生を創る」と言うことです。

「区民間での合意形成を図る」「区民と行政の新しいパートナーシップをつくりあげる」ということは私たちの力不足のため十分満足のいくものではありませんでした。しかしこの白書をきっかけにして、これからの麻生区を暮らしやすい町にするための区民や行政の協働による町づくりのスタートが出来れば幸いです。

『ふるさと麻生』

編集責任者 杉本長治

麻生区役所では「魅力あるまちづくり推進事業」を進めています。麻生区文化協会は「ふるさと麻生再発見」という事業を頼まりました。小中学生の皆さんに「ふるさと心」を伝えようと考えました。皆さんのふるさととは麻生区です。

この麻生区は長い間人々がお互いに助け合い、自然と共生しながら作られてきました。皆さんの暮らしは多くの方々の願いや努力によって成り立っているのです。

この「ふるさと麻生」からふるさとの人々の心を読み取ってもらえれば嬉しいのです。そしてその心をいつでも大切に、様々なことを学んでいってほしいと願っています。



杉本長治さんの郷土愛は、個人的に依頼された書籍の制作にも現れている。



『地図で辿る思い出のふるさと』
柿生・岡上の歩み

編集責任者 中山茂

制作には、前麻生区文化協会会長の杉本長治さんが編集副委員長を担ってくださった。郷土愛に燃

えパソコンへの入力、資料作成に取り組んでくださった。

『七つの池とともに』
ふるさと早野を語る

編集・執筆 杉本長治

郷土史刊行の意図は、早野を築いてきた人々や早野の姿を記録に留め後世に伝え、早野の発展を願うもの。そのために

- 客観的な文献・文書とともに、早野に生きてこられた人々の記憶や思い出を記す。
- 従って、個人の名前、写真等も出来るだけ載せる。
- 構成、表現は出来るだけ親しみやすいものにする。

杉本長治先生の足跡を辿ると、先生の優れた人間性に心が打たれます。

杉本長治先生は長年の教育・文化・地域へのご功績により、平成十一年川崎市文化賞を受けられました。

振り返ってみると、私、千坂隆男は杉本先生に多くのご指導をいただきました。今回先生の追悼を書くことによって、そのご恩の深さと先生の暖かさに包まれました。

平成二十七年年度夏休み親子教室

豊かな体験を通し学びや感動をねがって

橋本 周

今年の夏休み親子教室では新たな講座もあり、各講座とも定員を大幅に上回り、教室を運営担当した菅野さん、富田さんは、調整や事務手続きに大変苦労された。参加した子どもたちは、猛暑の中、それぞれの講座に目を輝かせて充実した学びや喜びを体験したようである。

親子教室の取組み経過

麻生区文化協会の親子教室への取組みの歴史を辿ってみると本会の活動の中心は成人の学習や活動であるが、未来を担う子どもたちに文化を伝えることも大切な使命であることから平成十二年、当時文化協会の事務局を担当していた中嶋瑳智子さんが「お楽しみ玉手箱」を企画。お得意の折り紙の技を活かして、子どもたちに当時人気が高かったピカチュウの折り紙に取り組み始めたのが始まりとされている。

その翌年から、子どものための茶道を加宮宗節先生、日本舞踊を藤間勘七孝先生、いけ花教室を麻生いけばな協会が担当された。これが好評を得て、発展し「夏休み親子教室」となる。

さらに、新たな講座も開設され、近隣の大学とのコラボや連携も生まれて

いる。区内の教育機関や団体との連携・協力による進化を目指した文化振興の活動が「夏休み親子教室」でも始動している。

平成二十七年年度親子教室の紹介

今年の親子教室は、十七講座を開催した。応募数は六〇五件、定員四二〇名、実参加者三三九名であった。

今夏は、前半が猛暑、後半は天候不順などで、体調を崩しての当日キャンセルが目立った。

各講座とも、役員・会員のサポートを得て実施。これからも多くのサポーターに期待したい。

スマホ顕微鏡 講師 佐藤勝昭

前半は、「ミクロの世界を覗いてみよう」と、パワーポイントで使い方を説明。スマホ顕微鏡を各自のスマートフォンやタブレットのカメラ上に乗せ、様々な試料を観察し写真やビデオに収めた。後半は、参加者全員がスチロール板とビーズ玉でスマホ顕微鏡を手作りし、ミクロの世界の観察を楽しんだ。

子ども茶の湯 講師 加宮節子

茶の湯の礼儀・作法を分かりやすく丁寧に説明する。実際に作法にそって抹茶を頂き、自分で茶をたて、床の間に飾

られた茶花を愛で、緊張しながらも「たび寂」の茶の湯の世界を初体験した。講師と助手の方々の連携も見事。

子ども五七五 講師 笠原登

・五七五のリズムにのせて、楽しい言葉の表現。
・感性みがき。
・出来た作品の中からお気に入りを入り色紙に毛筆で書く。

今回は、低学年の参加が多く本題に入る前に、講師は児童との一体感が深まるよう努めておられた。さすが専門家事事な導入と指導であった。



自分の名前を大きく書こう 講師 笠原恒子

今年は一・二年生が多くサポーターも大忙し。教えることに慣れた講師から「大きな文字を書く」ことで毛筆の使い方を理解し、毛筆が上手になれば、硬筆が上手になることを学び体験し

た。小学校の「硬毛一体」にかなうよう指導されていた。

紙粘土で人形を作ろう 講師 岩田輝夫

昨年までの「焼き物作り」とちがって、今年「紙粘土による埴輪や人形作り」の取組みであった。参加者は低学年が多かったがみんな一生懸命、物作りの楽しさを体験した。作品を持ち帰ることができたので満足そうだった。

和紙で染めよう 講師 山本絢子

「たんで、はさんで防染し、染料につける」簡単な作業から美しい染色作品ができる体験。千三百年も前から伝わる夾纈染に出会い、大いに感動し、創造する喜びや充実感を共有しあった講座でした。

世界でたったひとつのうちわを作ろう 講師 小田島寛・紀美

・マープリングやたたみ染めの技法を学び、うちわの絵にする。
・プラスチックのうちわには、自由に絵を描く。
・竹骨のうちわを作る。

講師お二人の息の合った指導は、さすがである。リピーターの受講者もいて人気の講座だった。

親子で楽しむキッズ・ダンス 講師 井上恵美子

ダンスを通して柔軟な心と身体を養い、踊る楽しさや達成感を体験。導入は、ストレッチ・ウォームアップ、ステップ

を学ばせ独創性を引き出す。

一曲をマスターして、堂々と発表しあい交流が深まる姿に付き添いの保護者から拍手が沸く。

講師は汗だくの大奮闘だった。

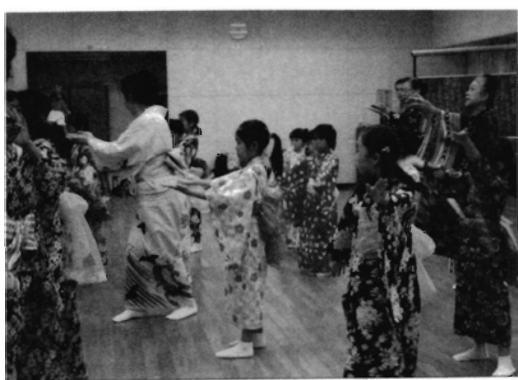
紙飛行機を飛ばそう 講師 千坂隆男

・いろいろな紙飛行機を作つて飛ばしてみよう。
・なぜどうして飛ぶのかを考えてみることで科学の芽を育てる。

実際に作つて、外で飛ばして、学び、遊ぶ楽しさを体験していた。

日本舞踊を学ぶ 講師 上田隆義

伝統芸能・舞台芸術としての表現を、次代を担う子どもにも伝えたい。情操教育にもとの願いから、ゆかたを着て日本舞踊を習い踊る楽しさを体験させようと講師の熱い指導により、見事に踊る姿が愛らしかった。



区民がいきいきと暮らす

まちづくりを目指して

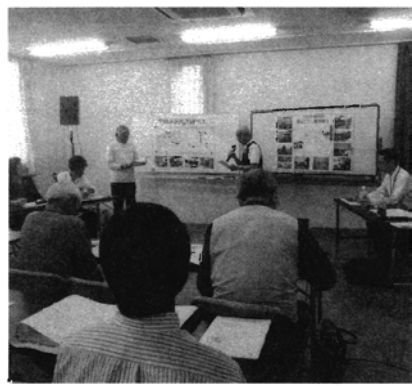
麻生市民交流館やまゆり 理事長 植木 昌昭 さん



現在、麻生区の市民活動の拠点となつていて、利用登録団体が六三〇を超え、活動を支える運営スタッフのボランティアが五十名以上という「麻生市民交流館やまゆり」(運営団体名 NPO 法人あさお市民活動サポートセンター)の理事長をしている植木昌昭さんを訪ねた。

私が初めて「やまゆり」に行ったのは四年ほど前、区役所と市民の協働事業として活動している「麻生区クールアース推進委員会」のレポート印刷のために「やまゆり」の印刷機を利用していただくためだった。その時の、スタッフの皆さんの丁寧な、そして、明るくいいききと活動している姿が今でも脳裏に焼き付いている。その後、何度か訪れたが、いつも最初の印象と変わらなかった。私の友人の何人かがボランティアとして運営に携わっているが、「やまゆり」の話

をするときはやはりいつも目が輝いているのである。そうしているうちに私自身が「やまゆり」のクラブ展に参加することにになり、二年前には陶芸教室の区民講師もやらせていただくことになった。その頃から、理事長の植木さんを知るようになり、何度かお話をしている中で「やまゆり」の運営を担っているボランティアの皆さんがいつもアットホームな雰囲気です。訪ねた方々に接し、明るく活動しているわけが納得できたように思っている。植木さんは「やまゆり」の建設計画の頃から検討委員として関わって、完成後も運営委員として地域の多くの方たちが気軽に利用できる市民活動の拠点作り力に注いできた。そして、この活動に取り組むようになったのは自分自身が「定年退職者セミナー」に参加したことがきっかけになったそうである。そしてこのセミナーに参加していた皆さんとセミナー終了後も、この熱気ある会をそのまま終わらせてしまうのはもったいないというところで有志の皆さんといくつかの分科会をつくりあげた。そして、この会を地域の皆さんの役に立つ会に育てていきたいという強い思いが今の活気ある



「やまゆり」を作り上げていくことにながったのではないだろうか。団塊の世代が六十五才を超え、その多くの人たちが仕事から解放された今日、仕事一筋に打ち込んできた方たちの中には自分がこれから何をしたいのかいいのかが見つからずにいる人も多いい言われている。植木さんは、このような知識や技術を持っている人たちに新しい仲間との出会いの場を作り、地域デビューをしていただくための様々なセミナー向けのセミナーなども行っている。今、植木さんは「やまゆり」を麻生区の「サロ文化」の拠点にし、より多くの区民の方たちが気軽に集える場になることを目指している。

平成二十四年度には、文化協会も「やまゆり」のこのような活動に対して文化振興賞を贈った。これからも連携をとりながら麻生区の文化発展のため活動する仲間として交流を深めていきたい。(岩田輝夫記)

ゆかたを着て楽しい童謡を踊る

講師 加藤孝子

ゆかたを着て日本のな挨拶や立居振舞いなとマナーを学ぶ。
綺麗な絵日傘で踊ったり、自分で作ったてる坊主を持って踊る。
日常と違った体験をした子どもたちの笑顔に参観者も感動していた。

鶴見川と生き物 講師 宮田和也

「昨年スタートした」和光大学かわ道楽」の学生講師による屋外での講座。
鶴見川大正橋付近で、川に入って魚を捕まえたり、川のクリーンアップをしたりと、普段体験できない自然の凄さや面白さを学ぶ有意義な講座だった。

世界でたった一枚の絵手紙を書こうと子どもたちは挑戦した。絵の具・書道具など使い絵を描き、ことばを書く。講師から説明や助言を得ながらオリジナル作品が生まれて大喜びであった。

子どものための和太鼓教室

講師 菅原陽子

講師は、和太鼓に入る前に、日常大事な礼儀作法や地域の歴史を語り伝えた。太鼓の取組みはバチや太鼓の扱い方から、地元で伝わる「巻狩太鼓」まで、熱心に習得し、力強い演奏で成果を披露した。

レッツトライいけば花 講師 倉田理貴

日本の伝統文化、いけば花を分かります。楽しく学ぶ。今回は、特に流派に拘らない現代華(自由花)で、子どもたちが独創的に工夫し、楽しみながら生けられるよう指導。出来上がった作品は個性が光る子ども華展のようだった。

お手玉を作って遊ぼう

講師 橋本周

家庭で当たり前に見られた裁縫する風景が珍しくなった中、針と糸を使い布を縫うことの新しい体験を、お手玉作りを通して学ぶ。

手伝ってもらいながら各自三個作った。お手玉でわらわら遊びながら楽しく交流した。

墨絵で夏の思い出を描こう

講師 志村幸男



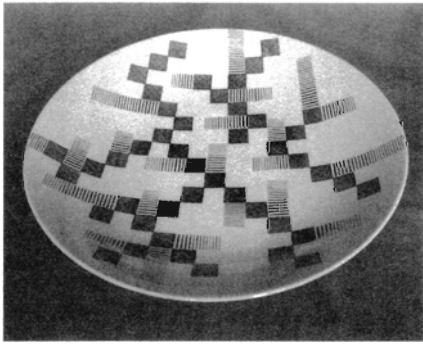
墨を中心に描かれる絵が水墨画で、中国ではじまり日本に伝わった東洋的な絵である。道具は、硯、墨、筆、和紙などを使うこと。丁寧な説明と教えを受けて難しい墨絵に初挑戦！二時間正座し、

会員の活躍

東日本伝統工芸展

入選 深野怜さん

文化協会美術工芸部の深野怜さんの染付の磁器皿が本年四月に行われた「第五十五回東日本伝統工芸展」に入選した。工芸の各部門の入選作品が展示されている日本橋の三越を訪れた。入選作品だけにどの部門の作品も非常に高いレベルで、圧倒される思いであった。この伝統工芸展はプロの作家でも入選するのが難しいと言われてい。その中にあつても深野さんの染付銀彩皿「奏鳴」は見る者に感動を与え作品であった。今までも深野さんはこの展覧会に二回入選しており、今回で三回目の入選である。深野さんは陶芸の他にも日本画、茶道、俳句など色々な日本の伝統文化に積極的に取り組んでいる。(岩田)



染付銀彩皿「奏鳴」

めざましい胡桃バレエの活躍 伊藤胡桃さんよりメッセージ

昨日(きのう) 今日(きょう)
明日(あした)とつづく

胡桃バレエの誕生は一九八三年白山ポプラの集会所でした。当時初めてバレエに出会った子達が今一流バレエ団で活躍中。一九九九年にスタジオが建ち三十年の歩みを経て、昨年はかわさきバレエコンクールで川崎市長賞、教育委員会賞、他のコンペではコンテンポラリー一位。今年も新国立劇場研修所に合格、かわさき(前出)で四位の成績を得ました。

ある時三人が「私はプロのダンサーになりたいです。」と宣言。本当に？

日本のバレエ水準は高く、バレリーナへの夢に向かい大勢の人が日々研鑽を積んでいます。目指すための条件は第一に、その事にどれだけ情熱を持ち続けられるかにあると思います。

スポーツでプロになる難しさと同様、バレリーナになるのも苦難の道です。なれないのなら努力する意味がないと考えるのではいいのです。自分を磨きバレエを続ける間に培われる形の見えない財産が身につくはず。その先に何かが実ると信じ、それぞれが自分の夢の扉を開けられるように明日も指導に打ち込みます。

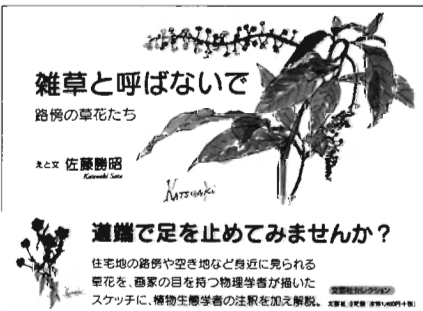
(伊藤胡桃)

雑草と呼ばないで

絵と文 佐藤勝昭さん

文化協会が総務を担当している工学博士であり、洋画家でもある佐藤勝昭さんがまたまた素晴らしい本を出版した。今までも専門の物理分野での本は何度も出版していたのであるが、この度は画家として、毎日犬の散歩をしているときに路傍でスケッチした草花を水彩で彩色し「雑草と呼ばないで」という題名で出版した。通常、展覧会に出される大きな絵は油彩作品が殆どであるが、個展などでは油彩、水彩の両方を出されることが多い。今回の草花のスケッチは毎回フェイスブックに載せられたので、見ている多くの方々はその一冊の本にして出版することを望んでいた。

この本の楽しさは、絵の素晴らしさよりも、二つの草花について記した作者の蘊蓄が興味深く、また、フェイスブックに寄せられたコメントを載せていることも大きな特徴の一つである。是非見ていただきたい一冊である。(岩田)



文化協会のこれから

第31回麻生区文化祭開催

(10月30日~11月8日)

文化協会の主な行事の一つです。総合プログラムを参考に、ご参加ください。

大ホール 邦舞、邦楽(10月31日)

洋舞(11月1日)、麻生フィル(11月8日)

ギャラリーオープンスペース

美術工芸展(10月30日~11月4日)

大会議室 川染雅嗣氏の講演とピアノ

演奏(10月31日)、俳句大会(11月1日)、吟詠大会(11月8日)

3階ロビー 秋水書道会展示

俳句の展示(般小学生)

あたらしい風と創造

第31回 麻生区文化祭 プログラム

平成27年10月30日(金)~11月8日(日)
会場:麻生文化センター(麻生区麻生)

10月30日(金)	11時~17時	美術工芸展
10月31日(土)	11時~17時	邦舞・邦楽
11月1日(日)	11時~17時	洋舞
11月8日(日)	11時~17時	麻生フィル

これからの行事

・28年1月7日あさお古風七草粥の会

・28年3月7日~13日

アルテリツカ力新ゆり美術展

・28年3月5日 雑学教室(講演会)

■文化協会の現在の会員

顧問7/専門委員5/団体会員37

個人会員95/賛助会員1

■新会員を歓迎します

入会案内パンフレットが出来ました。

新会員募集にご利用ください。



編集後記

「からむし」59号を手にとられて、お気づきになりましたでしょうか。今号から少し大きいサイズになりました。麻生区文化協会も31年になり「あたらしい風と創造」を掲げ、いろいろ新しい試みをしています。「からむし」も版を大きくし、表紙は今までの「神社仏閣」シリーズから「麻生の自然と風物」になりました。発行時期も秋の文化祭前と春の総会後にすることで、新しい情報を掲載していきたいと思っています。

▼今だから伝えておきたい「麻生の今昔」や、会員の活躍紹介、団体の紹介等も掲載し、皆様の活動のエネルギーの一助になればと願っています。(横須賀)

編集委員

岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本周、横須賀朝子

麻生区文化協会会報

からむし 第五十九号

平成二十七年十一月一日発行

発行人 麻生区文化協会

会長 菅原敬子

編集 麻生区文化協会広報部

川崎市麻生区万福寺一五二

麻生文化センター内

印刷 (株) エリアブレイン

電話 〇四四一九五一―三〇〇